

◆ 今週のコメント

- ・ 手足口病の定点当たり報告数は、3.17(130例)で、先週(2.54)に比べ増加しています。年齢階級別では、1歳が21.5%(28例)と最も多く、次いで2歳が19.2%(25例)、3歳が17.7%(23例)となっており、1歳～5歳で80.0%を占めています。行政区別では、南区、伏見区、西京区(定点当たり報告数 7.67, 5.00, 5.00)で多くなっています。
今月の「京都市こどもの感染症」(京都市衛生環境研究所作成)で、手足口病を取り上げていますので、ご参照ください。(http://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000007130.html)
- ・ ヘルパンギーナの定点当たり報告数は、1.41(58例)で、先週(0.76)から大幅に増加しています。年齢階級別では、1歳が25.9%(15例)と最も多く、次いで2歳 22.4%(13例)、4歳 17.2%(10例)、3歳 13.8%(8例)の順となっています。過去5年間では第28週～第32週(7月9日～8月9日)にピークを迎えています。今後の動向にご注意ください。
- ・ 腸管出血性大腸菌感染症の報告が1例あり、本年8例目となっています。8例の内訳は、O157(VT1VT2)が6例、O157(VT1)が1例、O26(VT1)が1例で、感染原因は、鉄板焼店の食中毒事例によるものが1件(4例)、生レバーや焼肉等の飲食物が3例、不明が1例となっています。
- ・ 百日咳の報告が3例(0～5箇月, 10～14歳, 20歳以上)あります。本年の累積報告数は11例で、年齢階級の内訳は、10～14歳が3例、20歳以上が2例、0～5箇月, 6～11箇月, 2歳, 3歳, 9歳, 15～19歳が各1例です。

◆ 今週のトピックス: <流行性耳下腺炎>

流行性耳下腺炎の定点当たり報告数は、1.46(60例)で、本年で最も多くなっています。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数報告の感染症

- ・ 三類:腸管出血性大腸菌感染症 1例【1月以降の累積報告数 8例】
- ・ 五類:アメーバ赤痢(腸管アメーバ症) 1例【1月以降の累積報告数 10例】

定点報告の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	0.01	1
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	3.95	162
	② 手足口病	3.17	130
	③ 流行性耳下腺炎	1.46	60
	④ ヘルパンギーナ	1.41	58
	⑤ 水痘	1.24	51
眼科	流行性角結膜炎	0.30	3

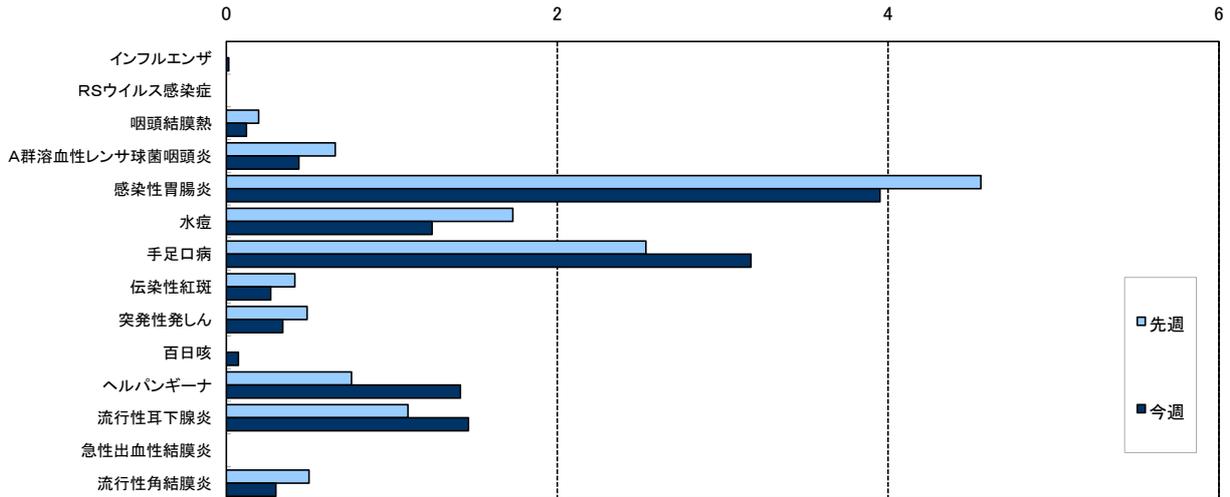
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <流行性耳下腺炎>

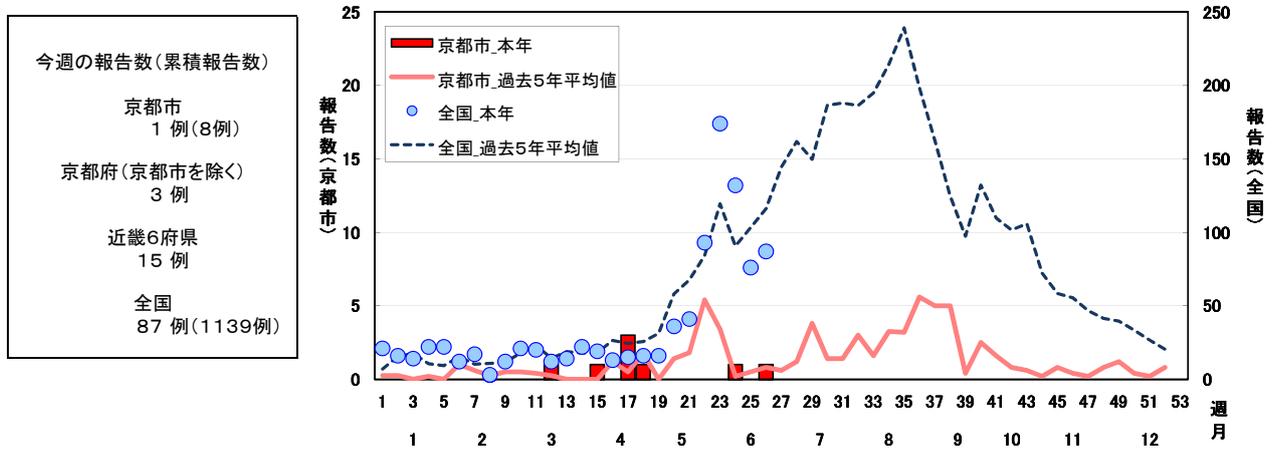
(注)京都市のデータは、平成22年7月8日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。
また、本情報での患者数は、届出医療機関所在地での集計で、患者の住所を示すものではありません。

◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第26週)と先週(第25週)の定点当たり報告数の比較

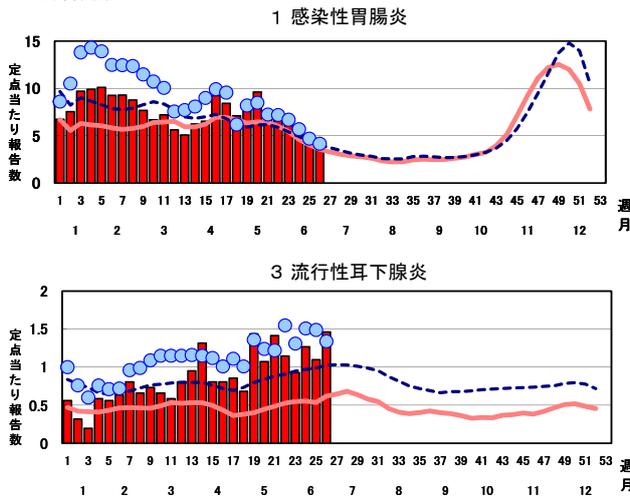


2 腸管出血性大腸菌感染症(三類感染症)の推移

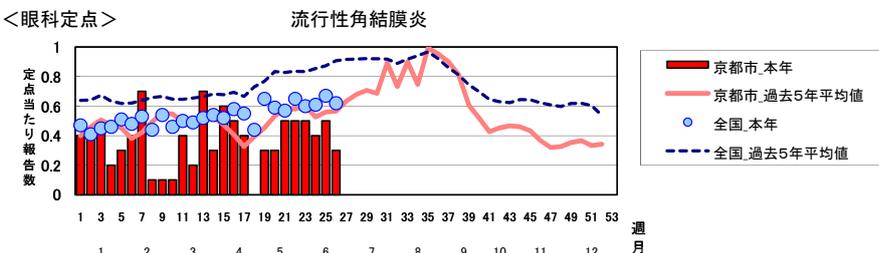


3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>



<眼科定点>



第26週(6月28日～7月4日)トピックス: <流行性耳下腺炎>

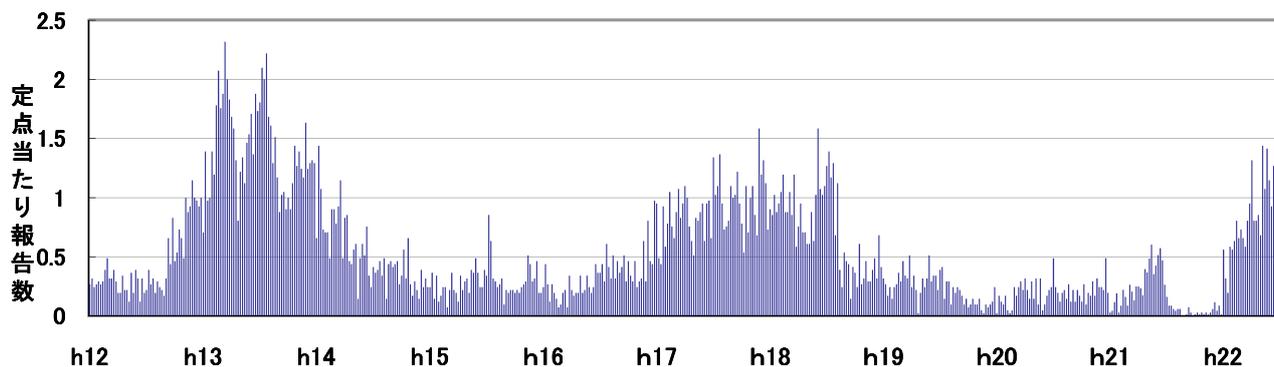
流行性耳下腺炎の定点当たり報告数は、1.46(60例)で、本年度で最も多くなっています。

過去10年間(平成12年から平成21年)の定点当たり報告数の推移をみると、数年おきに多くなっていますが、平成19年以降は、報告数が少ない状態が続いていました。本年に入ってから報告数は増加し、第19週以降、過去5年平均値を大幅に上回る状態が続いています。

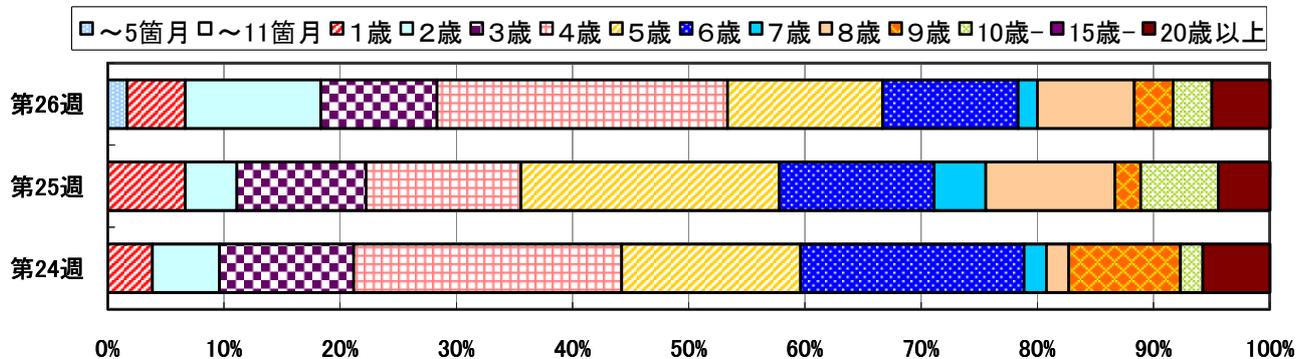
年齢階級別にみると、4歳が15例(25.0%)と最も多く、次いで5歳が8例(13.3%)となっており、2歳～6歳が71.7%を占めています。

行政区別では、南区、東山区、伏見区の順に多くなっています。

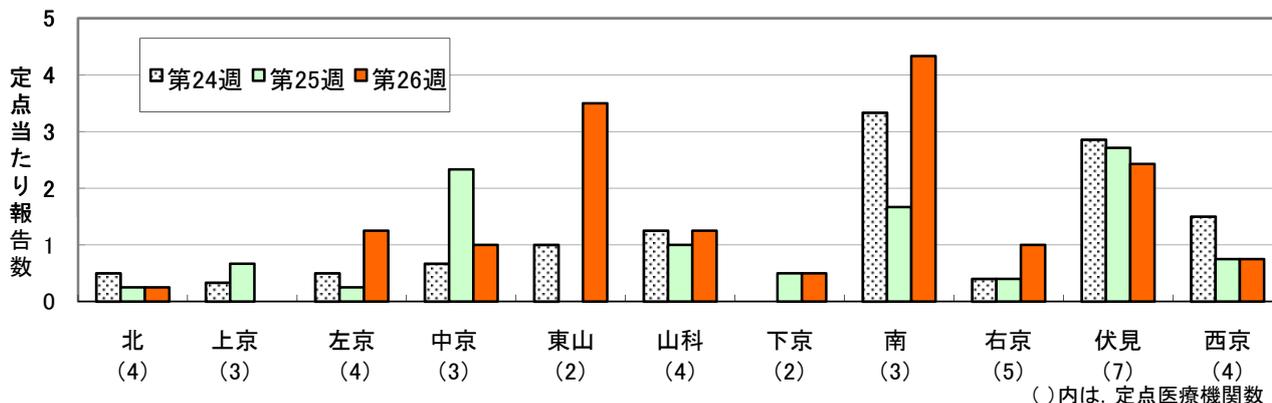
定点当たり報告数の推移(平成12年～平成22年第26週)



年齢階級別割合の推移



行政区別定点当たり報告数の推移



()内は、定点医療機関数